

〔講義ノート〕

アジアをどう見るか

光田 剛

ここに掲載したのは、二〇〇九～二〇一一年度の「政治学への案内」で私が講義で話した内容を記録したものである。政治学科では、教員の共著として教科書を作成するという合意がなされているが、現在は未着手のままである。この教科書が実現した場合の原稿の素案として本稿を寄稿した次第である。

現在、「アジア」を抜きに世界を理解することはできないだろう。しかし、とくに政治学の分野について見れば、私たちは十分に「アジア」を理解する方法を手に行っているとはいえない。その理由を突き詰めると、私たちの知っている政治学がヨーロッパ生まれの学問だということに行き着く。もちろんそのことにすべての責任を押しつけることはできない。「政治学」は、都市国家が最も完全な人間の政治生活の場だと思われていた時代の地中海世界で生まれた。もし政治学がその生まれた状況の下でしか通用しないとすれば、広い領域を支配する領域国家があたりまえになった後のヨーロッパでは通用しなかったはずだが、事実はそうではない。では、何が問題なのか。

その問いに性急に答えを出す前に、二〇世紀の半ばから後半にかけて「アジア」を論じる方法を模索し続けた一人

の知識人の試みについて考えてみよう。それは竹内好（一九一〇～一九七七年）という人物である。

あらかじめお断りしておこう。竹内好がその時代に考えたことそのもの、そしてその結果として導き出した結論が今日でもそのまま通用すると私は言いたいわけではない。

竹内がこれから紹介するようなことを考えた時期と現在とではアジアの状況は大きく変わっている。一例を挙げれば、竹内好が亡くなった一九七七年は、社会主義社会からさらに進んで「共産主義」の理想社会の実現を追求したプロレタリア文化大革命（文化大革命、さらに「文革」と略称される）が終結したとされる年の翌年である。しかも、私たちは後の時代に生きているから、一九七六年で文化大革命が終わったという共通認識を持っている。しかし、一九七七年当時は、まだ中国が社会主義化を深化させる方向に行くのか、「現代化」（近代化）に力点を置いて経済発展を目指すのか、まだよくわかっていなかった。現在の中国の経済発展に結びついている「改革・開放」政策はまだ始まっていない。当時は、まだ韓国も軍事政権下にあったし、台湾も国民党一党強権支配の時代だった。イラン革命とエジプトでのサダト（サーダート）大統領暗殺によって、当時は「イスラム過激派」・「イスラム急進派」と呼ばれた、今日のイスラム「原理主義」の存在が世界的注目を浴びるのももう少し後のことである（「原理主義」運動自体はずっと以前から存在したけれども）。まして、ここで取り上げる竹内好の論説は一九五〇年代を中心に書かれたものだから、中国の文化大革命もまだ始まっていない時期である。

竹内好の考えはそういう時代の「制約」を受けている。だが、だからといって、竹内好は、その考えたこと・書いたことをすべて「なかったこと」にするには惜しい思想家である。

私たちは竹内好の考えたことをどう受け継ぎばいいのか。そのことに答えを出すのもやはり後回しにして、まず、

竹内好のアジア論の構造を解き明かしてみたい。

一 竹内好のアジアの「近代」論

竹内好のアジア論の基本構図は「ヨーロッパの侵入に対するアジアの抵抗」というものだった。ただし、「侵入」・「抵抗」と言っても、それは政治的・軍事的なものとは限らない。文学者であった竹内は、文学活動も重要な「抵抗」の場であった。竹内は魯迅（一八八一―一九三六年、本名は周樹人。弟の周作人も文学者）という文学者の活動にその「アジアの抵抗」を見出している。^①

また、竹内は、ヨーロッパ（西洋）は進歩するが、アジア（東洋）は進歩しないという図式を持っていた。アジアの社会や国家の制度は「変化」はしたかも知れないが、「進歩」はあくまでヨーロッパ的なものだった。アジアは変化はしても進歩はしなかったのである。

そこにヨーロッパが侵入し、アジアに進歩を持ちこんだ。アジアはヨーロッパによって進歩をもちこまれたことで、自らも進歩を始めた。

その「進歩」によって到達する時代が「近代」である。^②

ヨーロッパまたは欧米（西洋）がアジア（東洋）に暴力的に侵入することでアジアの進歩が始まるという見かたを「西洋の衝撃」（ウェスタン・インパクト）論という。ここでは、「欧米―暴力的な侵入者／アジア―被侵入者」という図式と「欧米―進歩／アジア―停滞」という図式が、いわばねじれた状態で組み合わさっている。暴力的なことはよいことではない。しかし、欧米の暴力的な侵入がなければアジアは停滞したままだった。一方で進歩はよいことで

ある（竹内好はそう考えている）。^③だが、それをもたらした欧米の暴力は肯定できるものではない。ここに「西洋の衝撃」論の難しさがある。

これが、かりに「欧米は暴力によって停滞をもたらした」、「アジアは欧米の暴力的な侵入を受けなくても進歩した」であれば、竹内好が直面した難しさは避けて通ることができる。実際に、「欧米は暴力によって停滞（低開発）をもたらした」という図式はいわゆる「従属理論」で行われた。また、現在は、全面的に、とはいえないにせよ、いずれかの分野では、あるいは、ある程度は、「アジアは欧米の暴力的な侵入を受けなくても進歩した（進歩していた）」という見かたがむしろ多くの人に受け入れられている。そう言っていいただろう。

したがって、この竹内好のアジア観の「西洋の衝撃」論的な構造は、現在の政治発展論・経済発展論やアジア論のなかでそのまま通用するものではない。しかし、そのことを論じる前に、竹内好のアジア論の構造をもう少し深く探ってみよう。

このような「西洋の衝撃」論は、「近代」へ向けての「進歩」、つまり「近代化」は単線的に行われるという単線的発展論に結びつきがちである。遅れて発展するアジアは、先行するヨーロッパの後を追って、何年か遅れで同じような発展をするはずだというわけである。^④

だが竹内好はそうは考えなかった。自ら順調に進歩したヨーロッパと、ヨーロッパの暴力的侵入によって押しつけられることで進歩を始めたアジアでは、それぞれの近代は自ずから異なるはずだと考えた。「西洋の衝撃」論を採用しながら、「アジアに独自の近代」を主張したところが竹内好のアジア近代論の特徴である。

では、竹内好によれば、アジアの近代の独自性とは何か。

アジアは「近代」の最初でヨーロッパに敗北している。この敗北に対処しなければならなかったことがアジアの「近代」の特徴である。ヨーロッパは敗北していないので、ヨーロッパの「近代」には敗北への対処は必要なかった。

敗北は苦痛である。敗北の苦痛から逃れる方法は、その敗北を忘却し、苦痛に抵抗を放棄することである。

だが抵抗を放棄することは墮落につながる。墮落すれば奴隷になってしまう。

奴隷は苦痛から逃れるために主人に迎合するような行動をとる。また、奴隷は、機会があれば、自分で主人となり、他人を自分の奴隷にしようとする。したがって、主人と奴隷から構成される社会では、一人の人が奴隷の境遇から脱出しても、その人は奴隷の主人になるだけであり、奴隷を使う社会の仕組みは再生産されてしまう。社会から奴隷がいなくなることはない。

自らが奴隷にならず、奴隷を使う社会の仕組みをなくすためには、敗北に抵抗しなければならない。敗北は苦痛なので、敗北に抵抗することは、その敗北の苦痛に抵抗することである。また、敗北の苦痛から逃れる方法はその苦痛を忘却することなので、敗北に抵抗し、敗北の苦痛に抵抗することは、敗北の苦痛を忘却することへの抵抗でもある。

この抵抗こそがアジアの「近代」の特徴であると竹内好は論じる。^⑤

この「敗北—苦痛—忘却—抵抗」の理論を、竹内好は魯迅を参照することで組み立てている。^⑥

魯迅は、その初期の代表作「阿Q正伝」（短篇集『呐喊』に収録）でその「奴隷根性」を描いている。主人公は街で日雇いの仕事をしている農民で、「精神勝利法」という方法を身につけている。これは、たとえば、人に殴られたとすれば、それを「自分は人に自分を殴らせてやった」と解釈して、自分のほうが優位だと考えることによって精神的な勝利感を得る方法である。「ポジティブシンキング」だといえそうなのだが、この「精神勝利法」の持ち主は、

人に殴られたことを「殴らせてやった」として勝利感を得るだけでなく、機会があれば人を殴って勝利感を得ようとするところが問題である。それでは「人を殴る社会」はなくならない。その結果としてできたのが「人を食う」ことを麗々しい文章で飾り立てる「人を食う礼教」の世界である（『狂人日記』。『呐喊』に収録）。阿Qは魯迅がこれを書いた時代（一九一〇年代後半）の中国人の象徴であり（阿Qの「Q」は頭から辮髪を生やした中国人の象徴だともいう。「阿：」は中国の南方でよく使われる愛称）、その時代の中国は「人を食う礼教」の支配する社会だった。

また、魯迅は、小説だけでなく、「雑文」と呼ばれる短い時評や評論でも知られる。魯迅は、一九二〇年代に「花なきバラ」・「忘却のための記念」を書き、自分の教え子が当時の北京政府の弾圧で死んだことについて論じている。それは魯迅の苦痛への抵抗であり、苦痛を忘却することへの抵抗だった。竹内好は、これらの翻訳を岩波文庫の『魯迅評論集』に収録している。魯迅の雑文を集めたこの『魯迅評論集』は、魯迅の考えかたばかりでなく、竹内好が魯迅の何に関心を持っていたか、何から学ぼうとしていたかをよく示す一冊になっている。

竹内好のアジアの「近代」論は、この魯迅の論理を用いて組み立てられているのである。

なお、ここで、竹内好は「墮落」・「奴隸」をカタカナで「ダラク」・「ドレイ」と書いている。第二次世界大戦後、漢字の存在を日本文化の遅れの表れとみなし、その遅れゆえに日本は東アジアで戦争を起こしたとみなして、漢字の使用を減らし、将来的にはなくしてしまおうという運動があった（現在でもある）。中国では近代・現代になっても漢字ばかりで文を綴る。竹内好の例は、中国の文学を専門とする知識人がこの漢字制限論にどういう態度をとったかという一例である。

竹内好が活発にアジアの「近代」を論じていたのは一九四〇年代末から一九六〇年代初めである。竹内好は、アジ

ア（東洋）の抵抗の具体的なあり方をアジアの社会主義に見ていた。とくに、中国の「毛沢東コース」（「コース」は「路線」）にそれを見出していた。

第二次大戦の、あるいは、「大東亜戦争」（右翼的な人びとを除いて、戦後の多くの人が忌避したこのことばを、竹内好は使っている^①）の敗北の痛手からさめやらない戦後日本の人びと、まだ「占領された日本」だった時代の日本人にとって、一九四九年の中華人民共和国の成立、つまり毛沢東の共産党によって統一された中国の出現は衝撃的なことであった。満洲事変（一九三一―三三年）以来、日本が戦い、ついに打ち負かすことができなかった相手は蒋介石・国民党の率いる中国であり、毛沢東・共産党はその提携相手に過ぎなかった。しかも、竹内好自身を含む、戦時下にも中国に関心を持ちつづけた人たちにとって、国民党と共産党の一九二七年からの血で血を洗うような敵対関係は周知のことであった。しかも戦後の蒋介石・国民党はアメリカ（合衆国）の支援を受けていた。戦後の日本人にとって、蒋介石・国民党が中国を統一するのはあたりまえであっても、毛沢東・共産党が中国を統一するのは予想外のことであり、衝撃だったのである。

その中国共産党の強さの本質を、竹内好は、中国化された社会主義・マルクスレーニン主義としての「毛沢東コース」に見出していた。

しかし、社会主義はヨーロッパで生み出された思想であり、マルクスレーニン主義もマルクスの社会主義をレーニンがロシアで発展させた思想である。アジアが自ら生み出した思想ではない。それがアジアの抵抗の思想として役割を果たせるのはなぜだろうか。

それは、もちろんアジアでの「毛沢東コース」の実践によるのだが、もうひとつ、竹内好はロシアの役割にも注目

する。ロシアには、ヨーロッパとしての一面とともに、アジアとしての一面もある。竹内好によれば、ロシアの文学者ドストエフスキもトルストイも、ロシアが「ヨーロッパとしてのロシア」になりきることに抵抗した。竹内好はマルクスレーニン主義にも同じ性格を見出す。それは「ヨーロッパになりきる」ことに抵抗するマルクス主義だった。だから、マルクスレーニン主義はアジアの抵抗の理論として役立つ。それが竹内好のアジアの社会主義についての考えかただった。

二 アジアの「近代」と日本

先に少し述べたように、竹内好は、進歩することも、進歩によってもたらされる「近代」も基本的にはよいものだと考えていた。竹内好は「進歩的」な文化人・知識人にはときおり強い嫌悪・反発を示す。その理由は後に述べるとして、しかし竹内好は進歩も「近代」も否定していないし、むしろ、いずれは進歩して「近代」に向かわなければならないと考えている。したがって、竹内好を反進歩・反近代的思想家として位置づける試みはあるが、竹内自身の立場からいえばそれは誤りだと言うことになる（だからといって「反進歩・反近代的思想家」として竹内好を論じてはいけないというわけではない）。

したがって、ヨーロッパの「侵入」に抵抗するといっても、抵抗して進歩を拒絶し「近代」を拒絶するという方向を竹内好は考えない。進歩しなければ、墮落して奴隷になってしまうと竹内好は考えている。アジアは、ヨーロッパの侵入には抵抗しながら、自らは「近代」を目指さなければいけない。つまり、進歩して「近代」的になることを目指さなければならないけれども、その進歩はヨーロッパの侵入に対する抵抗によって成し遂げなければならないので

ある。ここにアジアの近代に独特の屈折がある。

ここで、竹内好は、進歩の要件として、基盤が進歩しなければならないと言う。基盤とは、社会全体の仕組みや社会全体の構成などである。基盤が進歩しないまま、基盤の上に載っているものだけが「近代」的なものになっても、それは進歩ではないと竹内好は言う。

竹内好は、この視点から日本の「優等生」文化を批判する。

竹内好によれば、日本はヨーロッパと接触したときに、ヨーロッパに抵抗しなかった。抵抗せずにヨーロッパの「近代」をそのまま採り入れ、そのことによって、日本は成功した。それは、「近代」化の成功であっても、「奴隸的な成功」に過ぎなかった。⁹⁾

ここで注意しなければならない点が二つある。

一つは、「大東亜戦争」までの日本文化の批判は、竹内にとってけっして他人ことではなかったということである。竹内好は、「大東亜戦争」期にも文学者の一人として活動している。そのことを戦後の竹内好は「忘却」しようとはしなかった。「大東亜戦争」が中国に対する侵略戦争であったことは認めるけれども、同時に、欧米に対するアジアの抵抗の戦争だった面を正当に認めなければならないと、戦後の竹内好は主張し続けた。¹⁰⁾

もう一つの点は、その批判が、「大東亜戦争」中の知識人だけでなく、戦後の知識人に向けられているということである。戦後の「進歩」的な知識人の主張は、その内容こそ「大東亜戦争」のイデオログを担った知識人とは正反対だが、そのイデオロギーや思想に対する態度は「大東亜戦争」までの日本の知識人となら変わっていない。つまり、基盤を進歩させず、その上に載せるものを、たとえば「大東亜共栄圏」イデオロギーから、「民主主義」、あるいは

は、竹内好により近かった人たちのばあいだとむしろ「共産主義」に置き換えただけではないかというわけである。

竹内好は、マルクスレーニン主義が「進歩」の正しい方向と見ていたようである。しかし、最初からそれを「正しい」ものとして受け入れ、そう主張する共産党・共産党支持の知識人には共感せず、批判的だった。竹内好は、魯迅が「マルクス主義者ではなかったが、最終的にはだれよりもマルクス主義に近い立場にいた」と毛沢東に評されたことに強い共感を抱いていた。

竹内好は、欧米で成功したものをそのまま持って来、それが失敗したらまた新しい欧米のものを持って来て置き換えるような日本の優等生文化を批判する。そして、あの「大東亜戦争」の徹底的な敗北の苦痛も、その知識人によって「忘却」され、たとえば共産主義のような新しいものを持って来て「大東亜戦争」のイデオロギーに置き換えるような態度に反発を隠さなかった。

ここで批判の対象に上げられているのが平野義太郎の中国論である。平野義太郎は、「大東亜戦争」後、蒋介石・国民党による中国統一を展望したが、毛沢東・共産党による中国統一が実現すると、それを賛美した（と竹内好は位置づける）。毛沢東・共産党による統一を肯定するという点では、竹内好と平野義太郎は一致している。だが、平野義太郎が蒋介石支持から毛沢東支持に転じた安易さを竹内好は許容しようとしなない。そこに、日本を「大東亜戦争」を経て破滅に導いた優等生文化が続いていることを見出すからである。¹¹⁾

優等生文化を持つ日本は自生的な「近代」を持ち得なかった。つまりアジアの「近代」には到達できなかった。しかし、「大東亜戦争」の敗北でわかったことは、日本はヨーロッパ（西洋、欧米）のような「帝国主義」の国としても成功することはできず、ヨーロッパにもなれなかったということである。日本は「近代」国家のようであるが、日

本はヨーロッパでもなければアジアでもない。つまり、日本は何ものでもない。⁽¹²⁾

これは、竹内好のばあい、日本のだめさを嘲笑して言っているのではないということに注意しておく必要がある。「日本は何ものでもない」と言ったとき、その「日本」には竹内好自身の戦時下の活動の少なくともある部分は含まれているのである。竹内好は、だから、その「何ものでもない」地点から、自生的な「近代」を目指して独自の「進歩」を果たす以外にないと考えている。その出発点の確認である。⁽¹³⁾

しかし、日本以外のアジア（主として中国を考えている）はなぜ自生的な「近代」に到達したのだろうか？

それは、政府の「ものわかり」が悪く、一方では自分たちの「古さ」を守ることに固執しながら、一方ではヨーロッパの「帝国主義」の手先として利用されていた。アジアの人民は、そのような政府に抵抗し、ヨーロッパに抵抗しながら、自生的な進歩を成し遂げ、自生的な「近代」を手に入れるしかなかったのである。日本の人民は、政府やエリート層の「ものわかり」がよかったために、かえってその機会を失ったのであった。

三 方法としての竹内好

一九五〇年代を中心とする時期の竹内好の言論活動は、竹内の周辺にいた知識人たちの活動とも影響を及ぼし合うものだった。たとえば、哲学者の鶴見俊輔のグループは、太平洋戦争前・太平洋戦争中（竹内好のいう「大東亜戦争」下）の知識人の「転向」を倫理的な非難と切り離して研究し、それは身体的強制によってのみ起こるものではなく、生活から遊離しているという不安によって引き起こされたという面を強調した。そして、「転向」した者にも一定の一貫性を認め、また、ばあいによっては「非転向」を貫いた者にも実質的な「転向」を見出すなど、独自の批判的な

「転向」観を生み出したのである。思想は生活に即したものでなければならず、生活から遊離した思想は「転向」を起こしやすい。これは、竹内好が批判した日本文化の優等生的性格、基盤を進歩させないで上に載せるものだけを次々に取り替えていくという性格を、別の素材から批判したものだったとも言える。

また、丸山眞男は、「固執低音」（「通奏低音」と言われることもあるが、「通奏低音」と「固執低音」は別のものである）論や、後年には「古層」論を提起して日本文化を論じた。これらについて論じることは私の手に余るが、外来文化を「日本的」なものに変えていく日本文化の強固な傾向を丸山眞男も強く感じて相手にしていたのであり、これは日本に「基盤の進歩」がないことを問題視し批判していた竹内好とも共通する問題意識である。

竹内好も、自分の同時代の知識人について、その主張の内容や結論ではなく、どうしてその内容や結論に到達したかという点を注視し続けていた。そこに、自生的か優等生的か、奴隷的でないか奴隷的かという違いがあったからである。

先に触れた平野義太郎の毛沢東中国論についての嫌悪もその一つである。また、「二つのアジア史観」（一九五八年）という論文では、「日本はアジアではない」という主張では共通している梅棹忠夫の「文明の生態史観」と竹山道雄の「日本文化フォーラム」での発言を取り上げ、梅棹忠夫を評価しながら、竹山道雄については厳しく批判している。その理由は、梅棹忠夫は自らアジアを歩いて調査して「日本はアジアではない」という結論に到達したのに対して、竹山道雄は最初から「日本はアジアとは違う」という結論を持っており、そこに梅棹説の結論だけを継ぎ合わせたからだと竹内は説明している。最初から自分で調べて結論に到達するのではなく、自分の結論に合わせて他から議論を持つてくるのは優等生的であり、奴隷的であるという批判であった。

竹内好は魯迅論についても同じような議論を展開している。毛沢東は、魯迅の「自嘲」という戯詩をめぐって「外に出ると人に批判されていやなので／家で子どものためにお馬になってやっている」という表現を、「どんなに敵から批判されても自分は人民のために献身するのだ」と読み、魯迅を賞賛する。竹内好は、この毛沢東の「読み」を肯定する。しかし、それは、毛沢東自身の革命の体験に基づいた解釈だからである。だから、そんな革命体験を持っていない日本の「進歩」的な知識人が、その毛沢東の魯迅評を引用して「魯迅は人民大衆のために献身しようとした人だ」と論じることに対しては「そんな読みかたは無理だ」と厳しく反駁した。

さて、言論は自ら調べて考えて到達したものでなければ価値がなく、ほかの人の言論から結論だけ持ってくるのは優等生的であり奴隷的だという竹内好の批判は、竹内好と同時代の「進歩」的な知識人に対してだけでなく、近代的な学問への重大な問題提起にもなっていると私は考えている。

近代的な学問、つまり大学で学ぶ学問は、経歴や背景がまったく違う人にも利用可能なように、客観的・中立的な方法で客観的・中立的な業績を上げ、それを蓄積していくことを方法している。竹内好の「方法と結論は切りはなしえない」という主張は、この近代的学問への重大な問題提起である。だからといって、何もかも自分で一から確認していたのでは、現在の学問体系は成り立たない。竹内好の批判をどう生かしていくかは、私たちの課題である。

これは、最初に書いた、ヨーロッパ生まれの政治学をいかに「私たち」の政治学へと変えていくかという課題ともつながる。ヨーロッパの近代の持つ「普遍性」をどう考え、どう扱うかという問題は、私たちの課題であるとともに、その問題は竹内好自身にとっても問題だったはずである。

では、どうすれば「自生」的な知識を手に入れ、進歩することができるかというと、竹内好は決まった明確な方法

を示しているわけではない。

竹内好は魯迅のいう「あがき」(「掙紮」)という方法について書いている。何をしたいかわからないが、ともかく苦しいので暗闇のなかであがいている。そのなかから編み出されたのが自分の文学だというのが魯迅の第一短篇集『呐喊』での主張である。

竹内好の「方法」にもこれと似たところがある。竹内好の文章は必ずしも論理的に構成されてはならず、そのなかには非常に難解な印象を与えるものがある。また、論理的な文章は、最初にことばの定義をはっきりさせ、それをもとに叙述していくものであるが、竹内好のばあい、わざと定義をはっきりさせずに議論を進めていくことがある。竹内好の文章は、自分で「あがき」、摸索し、その過程を含めて最終的に文章にしているのだ。それは、私たちが大学で学ぶべき「学問的に論理的で明快な文章」とは質が違うものである。

だから、私たちが竹内好が到達した「結論」だけを学ぶとしたら、それは少なくとも竹内好の書いたものよい読みかたではない。もちろん、竹内好が到達した「結論」だけに注目してそれを非難したり否定したりするのもよい読みかたではない。

竹内好が見ていたのは、貧しい中国であり、現在のように「共産党が独裁的政治権力を握っているというだけの社会主義」ではなく、社会全体を社会主義的に、さらには社会主義の理想である共産主義に向けて改造しようと奮闘していた中国である。また、竹内好にとって、「アジア」での圧倒的な存在は中国であり、朝鮮・韓国については意識しているものそれほど多く論じてはいない。インドやイスラーム圏についても同じである。一九五〇年代にはチベット問題も起こっているし、台湾では蔣介石・国民党の支配に対抗する台湾独立派の運動も始まっており、それが

今日の台湾の主要な政治課題である「統独問題（統一か独立かの問題）」につながっているのだが、これらについても、私の管見の限りでは竹内好が強く意識していたようには見えない。

アジアの状況は大きく変わった。中国だけとってみても、中国は日本を抜いて経済大国に成長した。一九五〇年代にはもちろん、一九八〇年代でもほとんど考えられなかったことである。

そういうなかで、マルクスレーニン主義と「毛沢東コース」を正しい進歩の方向だと考えていた竹内好の「結論」がどれだけ有効性を持ちうるかという点、ゼロではないかも知れないけれど、あまり有効性は持たないと考えるのが普通だろう。それより私たちが学ぶべきなのは竹内好の「方法」である。しかも、竹内好の「方法」が何かを確定し、それをそのまま持って来て自分の方法にするのであれば、それはやっぱり優等生的だ。私たちは、もし竹内の「方法」から、学ばなければならぬようなものを感じ取ったならば、それに「抵抗」し、あがきながら自分の方法を見出し、いくべきだ。それが、たぶん竹内好の「方法」を学ぶということなのだろうと思う。

私は二〇二二年度の「政治学への案内」で、竹内好の「方法」をどう受け継ぎ、生かしていくかというレポート課題を課した。この、いくぶん（というよりずいぶん）意地の悪い課題⁽¹⁾に対して、多くの学生各位がまさに自分で考えて、自生的に自分の答えを導き出そうとしていたことに、私は心強さを感じた。

注

(1) 「私が魯迅に出あったのは、私にとっては、ひとつの事件であった」という竹内のいささか唐突な告白が、魯迅との出会いの衝撃をよく表現している。「中国の近代と日本の近代」（一九四八年。竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、一九九三年、二二頁。以下、竹内の文章の引用はすべて本書による）。

- (2) この「進歩」論・「近代」論は「中国の近代と日本の近代」によって構成した。「胡適とデュイ」(一九五二年)にも同じような認識が見られる。
- (3) この点で竹内は「日本ロマン派」の「文明開化の全否定」論とは総じて批判的だった。「岡倉天心」(一九六二年)、三九八頁。また「近代の超克」(一九五九年)二二二～二二八頁。
- (4) 「アジアにおける進歩と反動」(一九五七年) 一三六頁。
- (5) 「中国の近代と日本の近代」一六～一八頁。
- (6) 「中国の近代と日本の近代」三九～四三頁。
- (7) 「たしかに大東亜戦争という呼び名の復活は、危険な兆候ではある。しかしその危険は、回避するのではなくて、まともに取り組むことによって克服しなければならぬものだ。『日本人のアジア観』(一九六四年) 九三頁。竹内は「太平洋戦争」という語も使っている。戦時下の時代から内在的に論じるときは「大東亜戦争」、執筆時点から回顧的に論じるときは「太平洋戦争」を使っているようだが、その「使い分け」については精密に追ってみないと何とも言えない。
- (8) 「中国の近代と日本の近代」六～一七頁、四四頁。なお、ロシアが「半アジア」なのに対して、アメリカ(合衆国)は「超ヨーロッパ」として位置づけられる。
- (9) 「中国の近代と日本の近代」三四～三八頁ほかで繰り返し返される。
- (10) 「日本人のアジア観」九四～九六頁。
- (11) 「日本のアジア主義」(一九六三年) 二九六～三〇一頁。
- (12) 「抵抗がないのは、日本が東洋的でないことであり、同時に自己保持の欲求がない(自己がない)ことは、日本がヨーロッパ的でないことである。つまり日本は何ものでもない。『中国の近代と日本の近代』二九～三〇頁。竹内は、「自己保持の欲求」が、ヨーロッパを進歩にもアジア侵略にも駆り立てたと考えている。
- (13) この「中国の近代と日本の近代」での「日本は何ものでもない」という断定の印象は強烈であるが、いくつかの留保をつける必要もある。たとえば、総力戦としての「大東亜戦争」下の思想の状況について、竹内は「ある状況の下における抵抗と屈服はほとんど紙一重であった」とし(「近代の超克」二〇一頁)、状況に「屈服」したと見られている思想から「抵抗」の要素を救い出そうと努めている。また、「日本ロマン派」を代表する保田與重郎について「空白なる思想」が彼の思想であり、空白でなければ不死身であることはできなかった」と竹内は書く(「近代の超克」二二二頁)。これらの叙述から、竹内が「何もでもない」というときの「ない」「無」「空白」について、どういう感覚をもっていたのかを考究する必要があるだろう。

しかも、竹内がこの「日本は何ものでもない」につづいて述べている部分は、日本の「学者」（優等生）文化への強いいら立ちに満ちているが、一方で「日本は東洋か、ヨーロッパか、どちらでもないか」という「観念」的な問い方そのものを相対化するものでもある。

(14) 竹内自身が「方法としてのアジア」(一九六一年)で「方法としてのアジア」を「明確に規定することは私にもできないのである」(四七〇頁)と書いているのである！ なお、竹内の「方法」とは、「与えられた学説として受け取」という優等生的に行かないの対極にある行ないであった。「胡適とデューイ」三三八〇頁。